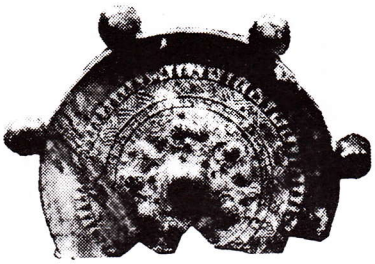
第 24 号　　平成11年6月1日

文化財やまと

大和町文化財保護協会発行



七鈴五獣鏡

明建神社の神帰り杉

会長　土松新逸

明建神社の社叢（しんそう）（岐阜県天然記念物）へ西から入り、二三〇㍍余の桜並木（横大門という）の東西両端に杉の大木（推定樹齢八百年）が立っている。この西端の大杉を神帰り杉（単に帰り杉ともいう）といって往時から里人に仰がれ親しまれている。

「神帰り杉」というのは、明建神社の例祭「七日祭（なのかまつり）」（岐阜県無形民俗文化財）の渡御の行列がこの大杉の下まで来て帰路につくのでこの名があるのである。このとき渡御の中の大獅子が帰路に向きをかえた途端に大あばれをする場面はこのお祭りの一見せ場であり、このあばれ方がよいと豊年であるといわれている。

この大杉は文化年間（一八〇一～一八）に落雷があったとのことで、樹冠がひどく枯れ、根本から数㍍樹幹の内部がえぐり取られていた。筆者が少年のころ大正年間（一九一二～二五）にはまだ樹冠は枯れたままで、樹幹もえぐり取られ、東北部が洞窟のように開いており子供たちの遊び場になっていた。妙見で生まれ育った筆者には、この大杉は大変なじみ深いものの一つであったので、樹冠が枯れて根元の空洞になっている大杉を見上げて痛々しい思いをしていたのであった。

その後筆者の青年期は郷里を離れ外地に勤務し、終戦後も妙見を離れることが多かったので、この大杉をつくづく見上げることもなかったが、八十年ほど経た今日、この大杉を見上ぐれば、昔の痕跡は全くわからないほど樹冠へは太い幹が三本伸びており、根本の空洞もすっかり充盈されている。枯れ枝も昔の様子を知らない者には見付からぬほど、樹木全体がのびのびとしている。

落雷があった一八〇〇年ころから二〇〇年ほどの年月にすっかり生気を取り戻したこの老杉の生命力の偉大さをしみじみと感じさせられるのである。

そして、推定八〇〇年ほどの間、世の移り行き、里の変わり様をじっと見下ろしていたこの老杉に限りない敬愛を感じ、今後何百年妙見の里を見守ってくれと切に祈るものである。

世の移り里の変わりを見下ろして老杉は今日も夕日に立てる

観音菩薩信仰

――雑想――

畑中浄園

文化財保護協会の一行三九名が彦根港を出港し、およそ三五分で竹生島に着港した。そぼ降る春雨の中を、切り石の石段を六十数段登ると、西国第三十番の宝厳寺である。本尊弁才天に礼拝し右に回って、崖に造られた重要文化財の船廊下を渡り観音堂につく。寺伝に、奈良時代の作りと伝えられている千手観音に合掌して、びわ湖を一望する。雨雲に遮られて、視界は零である。びわ湖は荒れているようである。観音菩薩が住居しておられるという補陀洛山も、このような所であろうか、しばし腰を下ろして観音信仰に思いを馳せる。

補陀洛山　補陀洛は梵語で、白華とか光明、海島などと訳されている。生身の観音菩薩が、海を渡る船を守護しているといわれる。インドでは東海岸にあり、セイロン島（スリランカ）への商人の海路を守る山であった。

中国では、上海の南方浙江省の海上、定海島に、補陀洛山がある。チベットでは、ダライラマが観音の化身といわれるので、その住居ラッサの宮殿を補陀洛といい、日本では紀州の那智山に補陀洛寺がある。

中国東晋の僧法顕（三三七ごろ～四二二）が三九九年、シルクロードからインドに入り、仏蹟を巡拝し、多くの経典を書写し、仏像を得て、帰りは海路セイロンを経て帰国の途中、暴風にあい、船の中に海水が流れ込んで危機がせまった。船長の商人が、荷物を海中に投げこみ、法顕のもたらした経典や仏像をも海中に投げられそうになった。法顕は一心に観音を念じ、我れ遠く求法の旅を終えて帰らんとする。何とぞ無事帰国ができるようにと祈った。不思議に大風はやみ、静かな海にもどったという（法顕の旅行記「仏国記」）法顕が念じた観音は、インド東海岸の補陀洛観音か、中国浙江省の補陀洛観音か、知る由もないが、当時の観音信仰の一端をうかがい知ることのできる記事である。

観音経　観音菩薩について説かれた経典は多くあるが、独立した観音経はない。阿弥陀経の訳者として有名な鳩摩羅什が訳した法華経の中の「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」が、独立して観音経として流布されるようになった。

これには、次のような幾多の現世利益が説かれている。

①もし人ありて、もろもろの苦悩をうけていても、観音の名を称えればその苦しみから解放される。

②たとい大火の中に陥っていても観音の名を称えれば火に焼かれない。

③もし大水に漂わされても、その名を称えれば、浅い所を得て水難をまぬがれる。

④金・銀・珊瑚等を求めて大海にのり出し、暴風がその船を吹いて羅殺鬼の国に漂着しても、観音の名を称えれば羅殺鬼の難からのがれる。

⑤まさに殺されようとするとき、観世音の名を称えれば、振り上げられた刀や杖が何段にも折れて助かるであろう。

⑥罪があり、また罪がないのに、手かせ・足かせ、鎖にその身がつながれても、その名を称えれば、これらがみな断ち切られて助かることができる。

⑦婬欲の盛んな者は、婬欲から離れられ、怒や憎しみからも離れ、愚痴を離れることもできるなどと説かれている。

三十三観音　観音経にはまた、衆生には色々の性格・資質をもった人間がいるから、それらを救うためには、三十三の応化身を現される。即ち、①仏身　②独覚身　③声聞身　④梵天　⑤帝釈天　⑥自在天身　⑦大自在天身（中略）㉚カルラ（巨大

雨にけむる竹生島

な鳥形の神）㉛キンナラ（薬草の神）㉜マゴラカ（巨大な蛇）㉝執金剛身（金剛力士）

この応化身三十三体に因んで、三十三所観音が建てられた。当町剣の観音堂山の上り（剣口）下り（大間見口）の道に三十三所観音が建てられている。弘化二年（一八四五）の建造で、千手観音が一五体、如意輪観音が六体、十一面観音五体、聖観音四体、准胝観音二体、馬頭観音一体、計三十三体である。

また、当町牧の篠脇山にも明治四二年建立の三十三所観音がある。

六観音　（七観音）仏教では、人は六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天）を輪廻転生すると説く。これを救って浄土に導く観音を、聖観音（地獄道を救う）千手観音（餓鬼道）馬頭観音（畜生道）十一面観音（阿修羅道）准胝観音（人道）如意輪観音（天道）の六観音をあげている。なお真言密教では、この外に不空羂索観音を加えて七観音といっている。

観音信仰の日本流通　仏教が日本に伝わった公式の年代は紀元五三八年といわれているが、実際には民間にはもっと早く伝わっていたと思われる。それは深遠な教理ではなく、ごく身近かな、現世を肯定した現世利益の観音信仰であったと考えられる。日本の説話集の最初のものは『日本国現報善悪霊異記』である。略して『霊異記』ともいうが、これは奈良の薬師寺の僧景戒が選した仏教説話集である。作られた正確な年代は分からないが、平安朝の初期と考えられる。この『霊異記』は、上・中・下の三巻からなり、飛鳥・奈良・平安初頭の三時代、およそ二百年近くの間の仏教の因果応報のもの語りをのせている。上巻に三話、中巻に五話、下巻に四話、計一二話に観音の利益が記載されており、特に救済力の強い千手観音や十一面観音の霊験をのべている。

聖徳太子と観音菩薩　推古天皇の摂政として三〇年間に亘り、多くの業蹟を残し、とくに仏教興隆に力を尽くされたことは、今更いうまでもない。太子が救世観音を夢殿に奉安し、ここにこもって、政治の理念を熟慮されたことはよく知られている。親鸞聖人が「皇太子聖徳奉讃」の中に、

竹生島宝厳寺・観音堂の唐門（国宝）

大慈救世聖徳皇
父のごとくにおわします
大悲救世観世音
母のごとくにおわします

と述べて、太子を救世観音の化身であると崇められている。

びわ湖周辺の観音信仰　以上観音信仰に関係した事項をあげたが、特にびわ湖周辺に観音信仰が盛んになった理由は、この地が京の都に近いためとか、比叡山天台宗の本山延暦寺のひざもとで、天台宗の末寺が多いことなども考えられるが、それにもまして、古くから、びわ湖周辺の住民が漁業に従事し、あるいは商人として湖上を往復するとき、観音はこうした人達を水難からすくうばかりでなく、水難で死んだ人々の霊を救う菩薩として、住民の信仰を集めたためと思われる。

びわ湖は、なお雲霧がたれ込めている。その霧の下から、いにしえの漁民の祈りが聞こえてくるようである。

宝厳寺の弁天像

「白雲山三十三所観音」の内
上有地村の寄進者について

武藤正文

今、町の文化財に指定されている「白雲山三十三所観音」が剣村・大間見村を始め、近郷の村々の有志の人達の寄進により建立されたのは、古文書によると剣・大間見両村の有志が、白雲山古寺跡に観音小堂祠を建てた天保十四年の三年後、弘化二年（一八四五）のことであった。この時、建立側の村役・有志達と郡上藩庁の間に色々いきちがいによる悶着があったようであるが、そのことはさておく。

この石像三十三観音は、観音堂への剣側登り口を一番とし、山頂堂近くの平らの部分に十七・十八・十九番、続いて大間見側参道を降り、そして最後三十三番は、その登り口にというように配祀されている。私が関心（疑問）を抱いたのは、その内の二体（二十八番と三十一番）が上有知村の人の寄進であることであった。上有知村（現在の美濃市、その中心部の旧町地区）は、当時、近郷の村というには一寸遠すぎる。どうして上有知の人がここへ寄進されたのかということと、また、寄進者の松屋金兵衛・山田屋弥藤治という方は、どういう人であったのかというのが私の素朴な疑問であった。

ちょうど、観音講の加藤小市さんが三十三観音の寄進者の由縁を明らかにしたいと、今考えておられることをお聞きして、これを機会に、私の前からの疑問を解いてみようと思ったのである。

その調査の経過は、紙面の都合もありすべて省略することにして結果として次のことが解ったのである。

まず、松屋金兵衛については、美濃市史にかなり詳しく述べられており、それによると松屋金兵衛家は、上有知の二の上町（現在の相生町）にあり、松屋は屋号であり、姓は西部である。（当主は西部晋司氏で現美濃市収入役、家業は薬局店）江戸時代中期までは宿屋を営み、その後菜種商となり、幕末からは薬種商として売薬業を営んでいる。上有知屈指の商家であり、町の素封家というべき家であった。江戸後期の文化年代には菜種を手広く商い、郡上の各村にもかなり売りさばいていたとの記録が残っている。幕末には、売薬業を専業とするようになったようであるが、それはいつからということは不明である。「剱村留帳」の記録の中に、金剱神社の祭礼の時、出店の中に上有知から薬売りが来ていたとあり、これは松屋金兵衛家中の者であったのではと思われる。

これらのことから三十三観音中の一体の寄進者、上有知の松屋金兵衛というのは、この人とみてまず間違いないだろう。

それならば、松屋金兵衛が、何故寄進されたのかという動機や理由については、何の記録もなく、不明である。以下は、全く私の推測であるが、金兵衛さんは、菜種や薬の商売のため、郡上と深い関わりを持っておられた。おそらく剱村へも脚を運ばれたこともあったであろう。たまたまこの地で三十三所観音建立の計画のあることを聞かれ、「それならば私も一体を」と申し出て寄進されたのではなかろうか。

次に、もう一体の寄進者、山田屋弥藤治についてであるが、この人も当時、上有知でかなりの名のある人であったことが伺われる。しかし、松屋金兵衛のように市史等の記録には全く見当たらない。ところが、この人について、美濃市在住の森政治氏（県歴史資料保存協会副会長）の大変なお骨折りにより、次の

上有知松屋金兵衛寄進＝十八番聖観音

ことが解り、ご教示を得た。江戸末期、弘化年間頃、上有知の惣庄屋であった四代目村瀬平治郎（号・敬忠）の長女が山田弥藤治に嫁しており、四代目の長男は、五代目平治郎を嗣いだがこの人が、かの有名な漢学者村瀬藤城（藤城は号、頼山陽が郡上の地を訪れたとき行を共にした）である。したがって弥藤治と藤城は義兄弟の関係にある。また、藤城と松屋金兵衛が、極めて親交深かったことは美濃市史に書かれている。また、先の森氏の調べによれば、山田屋弥藤治家は紙商であったといわれ、その商売を通して郡上と連がりがあったことも考えられ、そんなこんなの関係や縁により、弥藤治さんも金兵衛さんと共に一体の観音を寄進されることになったのではないかと推測するのである。余談であるが、山田屋弥藤治家の後裔は、名古屋市へ移られ、その後大垣市へ変わられたらしいということであるが定かなことは解らない。

因みに、三十三観音　寄進の村別数は、次のようである。

剱　村	八
大間見村	九
徳　永　村	二
内ヶ谷村	二
八　幡　町	七
長　滝　寺	三
上有知村	二

以　上

上有知山田屋弥藤治寄進三十一番聖観音

平成十一年度　事業計画（案）

4月　執行部会開催。

5月　執行部会、役員会（総会の事案他）、監査会の開催、会報「文化財やまと」第24号の発行、史跡標柱、案内板等設置の促進。

6月　執行部会、総会ならびに研修会（講演会）の開催。文化財収蔵展示館（仮称）建設促進委員会の開催。

7月　執行部会の開催、木蛇寺古跡の顕彰事業、東氏館跡庭園池泉等の清掃及び明建神社の桜並木の保護活動並びに、阿千葉城跡の管理作業の実施。

8月　薪能協賛及び文化財関係の来客に対応。

9月　執行部会の開催。

10月　役員会の開催。日帰り研修旅行の計画、町民祭への参加。

11月　執行部会の開催。日帰り研修旅行の実施。

12月　執行部会、役員会開催、一泊研修旅行計画。文化財収蔵展示館（仮称）建設促進委員会の開催。

2月　執行部会の開催。役員会の開催、一泊研修旅行の会員募集

3月　執行部会開催、一泊研修旅行の実施。

※以上の他、計画外として、検討のうえ本会の目的に参考となる展示会、発表会等のイベントには積極的に参観、参加の機会をとらえるものとする。

郡上一揆

偽造通行手形

高橋義一

㈠一揆の通行手形、偽造と断定

宝暦騒動時分の「通行手形」は、郡内町村の史料を一覧すると、『大和町史史料編（正編・続編上）』だけに、三通あることが分かる。これをその一揆関係の史料と検討して見る時、三通共に「偽造」と断定される。それ故に、これらはまた貴重な史料と言わなければならない。

㈡寝庄屋の通行手形、入手困難

宝暦四年（一七五四）夏、金森藩庁は郡中一二三か村の庄屋を呼び出し、年貢定免制（毎年一定の年貢）を検見取制（毎年検見して年貢を徴収）に改める事を一方的に通達した。郡中全農民は決起し、藩庁へ強訴して三家老免状（従来通り定免とする許可状）をかち取った。しかし翌五年七月、笠松幕府代官は、郡中の庄屋を呼び出し、「公儀の下知である。」として、検見取承認の捺印を強制した。以降、これら寝者村役と立者とが激突し、一揆は難航した。

まず立者がこまった事の一つに、江戸往きなど遠行に必要な通行手形が、寝庄屋から貰えない事であった。しかし同年八月、江戸藩邸へ出訴のため、代表六八人は破れ蓑・破れ笠・寝具用菰・古びた風呂敷を負って、何の分別もない乞食の群のようにして立った。関所番所は、乞食・渡世人等無国籍で手形のないものは黙過した。（大和町通史編）

後々、越訴人・飛脚らも一本差し振り分け姿で、江戸へ往来した。

㈢了泉寺宗門手形

この手形史料は『正編』に収録されている。他の二通は、今度の『続編上』に収められた。それは宝暦八年三月三日付中津屋村庄屋、同九年五月二五日付安養寺発行で、共に則次敏美家蔵である。しかしここでは紙面の都合で、了泉寺文書だけを扱う。文面は左の通り。

宗門手形之事

一此久八ト申者、代々浄土真宗当寺旦那ニ相紛無御座候、若外より切死（丹）宗門之由申者御座候ハハ、拙僧罷出申分ヶ可仕候、仍而証文如件

宝暦七丑年六月二十日

濃州郡上郡大間見村了泉寺㊞

御奉行所

本文口訳【この久八と申す者、代々浄土真宗当寺旦那に相違ございません。もし他より「切死丹宗門」と申す者がありましたら、拙僧が参りまして申し訳いたします。よって証文の通りでございます。】

㈣了泉寺中興の由緒

「大間見村了泉寺」というのは開基は大野口であった。古老の話では、日置姓の一統が戦いに敗れて劔周辺に落ち、寺を建てたという。

中世の寺坊というのは一般に土地開発の長級が開いたものだが、江戸幕府になると堂祠に至るまでみだりに開く事を禁じた。

寛永以降（一六二四～四三）郡上藩は小村に分割し、丈量して封建的近世化した村に整えた（白鳥町史料「那留村地検野帳」県近世史料「正保郷帳」）かくて大間見・劔村境が定められ、道場は劔村大野口に入ったが、昔通り「大間見村道場」（宝永三年文書へ一七〇八）を名乗った。

ところが無住になったため、村役・同行が金森藩庁にも掛け合い徳永村恩善寺住持の弟子を住職に迎え、寺号を了泉寺と改めた（寛延三年・一五七〇）。

宝暦九年新領主の青山藩に提出した寺の由緒の筆跡は、複写文の通り見事である。なお大間見村横地の現在地に、再建遷座したのは寛政四年（一七九二）である。

㈤偽造手形と断ずる根拠

①由緒書と同年暦の通行手形は、同一住持のものでなければならないのに、筆跡・印鑑が異なる。

②則次家文書、宝暦七年「寝者立者人別帳」には、手形の請人大間見村久八、という名前は無い。

③寺請の手形は、所属の家長名・本人の性別・年齢・行先・目的、宛て所等が明記されるものだが、「切死丹宗門」で無い、とだけ証言する極めて曖昧な文面である。

④徳川幕府は、切支丹禁令を強化し、寺院へは強力に下達し、全国村々にも高礼を掲げていた時代、責任重い住持が公文書的な手形に「切死丹」と誤る事は、まずあるまい。

㈥偽造・使用・保管に湧く疑惑

宝暦七年のこの頃、寝者立者の対立は激烈を極めた。『史料正編』及び「金森騒動記」「金森兵部少輔御治代騒動記」（八幡町史史料編二）によって見れば、立者の有力者に江戸行きの緊急用が出来したと思われる。そして急遽、手形を偽造し使用後、寺へ納めたものと疑問視するが、推理には次のように考える外ない。

手形は、手なれた筆遣いで村の長級の筆跡と思われる。けれ

ど本名を使ったり、「人別帳」にある久六・久七の名前をかたっても、事が発覚した場合面倒な事になる。また寺の関知しない偽造でなければ、難題出来の場合、寺に降りかかる。従って「久八」という架空人物で押し通すべく造って、寺へ持参した。

無断で村を出る事は、「逃散」という重罪に繋がりかねないからである。訳を明かし、家・村を留守にする事を頼み、極秘の行方を住持に託して立った。

帰るや住持に、長留守の礼を述べ、経過やみやげ話もして、用足した手形を納めた。感銘した住持は偽物を破棄せず、記念として保存した。—という訳である。

複写＝偽造手形と住職の筆跡印鑑

観音の里巡拝　知善院宝物館にて

観音の里をゆく

井俣初枝

日本で国宝の第一号に指定されたのが、恵心僧都のお名前で親しまれている源信僧都がお描きになったと伝えられる「阿弥陀聖衆来迎図」（通称、二十五菩薩来迎図）であったと本で読みました。二十五菩薩といっても私にわかろう筈もありませんが、仏像の中でも観音像が一番多いのではないかといわれているようです。

石道寺山ふところに初音きき

今年になって初めて鶯の声を聞きました。石道をのぼりつめたところに、質素な佇まいの石道寺がありました。顎をひき半眼を開いて私達を迎えて下さった観音さまは、私に、何を問うていられるのだろうかと思ったら身ぶるいがしました。一瞬私に気づかさせてもらえたのも事実です。この石道寺の観音さまは地区の人達によって守り守られてきたとのことです。

豊かな肉身に、薄い衣で包んだ観音さま。何が悲しいのか忿怒の観音さま。はにかみを持った観音さま。慈しみと、悲しみのお貌をもたれた観音さまにま見えた湖北の旅は、私にとっては、信仰の旅でもありました。

湖北の里

どどと来て船に乗り込む遍路かな

山形弁つかひ遍路の高笑ひ

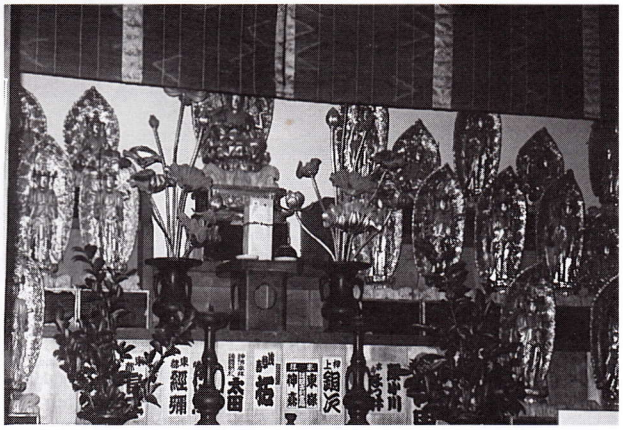
石道寺一歩一歩に花の雨

観音を畏み巡る初音かな

雲別けて春日届けし観世音

石道寺本堂

西明寺の三重塔



竹生島観音堂

平成十年度

事業報告

5月8日　文化財収蔵展示館（仮称）建設促進委員会執行部会。町内の文化財および民俗資料収蔵現況調査について　7名

5月11日　執行部会。平成10年度総会および役員会の日程他

5月20日　文化財収蔵展示館建設促進委員会。町内の文化財および民俗資料収蔵現況の調査実施（町民センター、万場民俗資料館、フィールドミュージアム史料館）12名

5月28日　役員会開催。平成10年度総会の開催について他　13名

6月1日　会報『文化財やまと』第23号発行

6月11日　平成10年度総会開催。記念講演

演題「岐阜県の女性史について」講師　前郡上北高等学校長　石神尭生先生　37名

7月16日　執行部会。東氏館跡および阿千葉城跡の清掃ならびに明建神社さくら並木の管理等の奉仕作業について　特に地元牧区長　本田欽一氏のご会同をえて協議

7月29日　東氏館跡および阿千葉城跡の清掃ならびに、明建神社さくら並木の枯枝、苔類の除去等の奉仕作業実施。33名

（特に本年の異常気象により池泉の溢水と作業中の雨に難渋）

8月7日　薪能『くるすざくら』協賛。

9月7日　執行部会。計画外事業名古屋市博物館「ブッダ展」の参観他

9月16日　執行部会。秋の日帰り研修旅行計画と、役員会の開催他

9月30日　計画外事業。郷土史研究会などと共催にて名古屋市博物館の「ブッダ―大いなる旅路展」と徳川美術館「田中訥言と尾張の画家達展」参観　44名

10月5日　役員会開催。秋の日帰り研修の開催計画について他（郷土史研究会と共催）

10月17日　大和まほろばサミット大和町において開催され、千葉県東庄町より両町の交流の増進をめざし、郷土芸能笹川神楽を持って、同町教育長以下23人到着、これに歓迎対応する。

10月18日　明建神社において笹川神楽が奉納せられ、見るものをして、遠来の好意と、朴訥異色の芸能に深く感動した。

（10号台風の来襲により町民祭などすべてのイベント中止の中で笹川神楽だけは神前奉納の初志を遂げてかえられる）

10月23日　秋の日帰り研修実施。行き先白鳥町石徹白、福井県泉村の文化財を訪ねて　48名

12月3日　執行部会。役員会の開催他

12月19日　役員会。平成10年度事業、会計中間報告および春の1泊2日研修旅行について他

2月15日　執行部会。役員会の開催について他

2月25日　執行部会。役員会開催準備他

2月26日　役員会。春の1泊研修旅行計画について他

3月26日～27日　春の1泊研修旅行実施。滋賀県湖東西明寺、竹生島宝厳寺、大津雄琴泊、湖北石道寺、渡岸寺、歴史民俗資料館、長浜知善院、黒壁他　39名

知善院本尊十一面観世音菩薩　鎌倉時代

文芸欄

短歌

春の雪　矢野原幸子

一途降る雪を一途にみてをりぬ我過きゆきの何を消残す

春の雪重すぎて桧が杉の木が身を裂かれゐし殺められゐし

健やかに生きて或は銘木となりしかも雪の桧林が哭く

裂かれたる桧の肌を両の手に撫して見上げし空の青さよ

サンサンと春光惜しみなくふれり雪の桧林の美しきこと

近江にて　土松新逸

純和洋建物とう瑠璃殿に静かにおわす薬師如来は

無骨者の火難免れたまいしとう御前にかしこみ手を合わすなり

一本も釘使わざる建物とう三重塔は仰ぎおろがむ

聖武帝の夢にて建ちしとう宝厳寺弁才天のやさしきみ顔

静かなる湖面を走る船の上竹生島へと心急ぐも

弱き足登る石段一つづつ観音菩薩にひかれ行くなり

仏像の難しき事知らねどもすがる思いの懐かしさおぼゆ

道行けば何処ともなく香い来る沈丁の花歩を止めさす

変わり行く自然の中に変わらずや古人も知るや浮寝鳥

ようやくに思いかないて竹生島登る石段雨伝い来る

日置智恵子

俳句

郡上節　高橋義一

蓮翹が艶爆ぜ雑踏押し除けり

孫巣立ち獅子の眼が泣く四月馬鹿

山路喘ぎ春蘭の舌長かりし

こぶし真白豊年の夢捨てがたし

花舞へば盃唱ふ郡上節

陽炎や狐野が車くすぐれる

不動さま笑ってご覧よ巨大馬酔木

燕の巣夫婦は忍耐茶をすする

蛇と不貞寝　黒岩きくゑ

野仏の後で脱ぎし蛇の衣

蛇いでて風青臭き畷道

蛇が又右へ左へ二枚舌

蝮屋の蝮かたまる油照り

風鳴って一と日不貞寝や牡丹散る

車停め　日置繁

車停め幼な出て来て蕗の苔

郁子咲くや語る縁起の七五三

風もなく梅の落果の午さがり

やすらぎの湯の香青嵐青田中

やすらぎの湯の灯映して植田水

平成十一年　四月末現在

会員名簿

（順序不同）

― 剣 ―

山下運平（顧問）　八八・二四〇六
籏　勝美（顧問）　八八・二〇三一
村瀬喜八　八八・二一二八
河合俊次（理事）　八八・二二四六
畑中澄子（理事）　八八・二五〇七
畑中定夫　八八・二一六八
小池久江　八八・二五七六
山下ふみえ　八八・三二二七
加藤正恵　八八・二一〇七
高橋　明　八八・二四八八
日置照郎　八八・二〇七二
加藤文蔵　八八・二八〇二
佐藤光一（理事・会計）　八八・三二〇一
田中　和久　八八・二二〇〇
高橋義一（副会長）　八八・三七九二
河合　恒　八八・二三五八
河合芳英　八八・二三〇四
加藤小弐　八八・二三二九
奥村千代子　八八・二〇二二
武藤正文（理事）　八八・三一九〇
田仲龍子　八八・二三六一
山下照代　八八・二四〇六
畑中節子　八八・四一五六
佐藤八重子　八八・三二〇一
畑中文子　八八・二三四一
畑中初枝　八八・三四七四
新蔵　守　八八・二三七五
野田八重子　八八・二一六二
高橋叙子　八八・三七九二
佐藤富貴子　八八・二八八九
山本みね子　八八・二六七一
野田三枝子　八八・三二六九
山田しずえ　八八・三二九六
岩崎扶美子　八八・二五二一
河合利雄　八八・三五二〇
河合美弥子　八八・三五二〇

― 大間見 ―

村井正蔵（監事）　八八・二三二三
青木新三　八八・二四三六
日置　繁（理事・書記）　八八・二二五四
大野紀子　八八・二二三〇
野田英志（理事）　八八・二二八五
小野江選量（理事）　八八・二七二六
清水一作　八八・三〇八六
池田充彦　八八・三〇九〇
小野江勉　八八・二七二五
池田道子　八八・二八七九
日置智恵子（理事）　八八・三〇五二
坪井政夫　八八・四〇九二
松井賢雄（理事）　八八・三九九一
古田　忠　八八・四〇九〇
藤代順行　八八・三〇六〇
大野一道　八八・二二三〇
玉木吉郎　八八・三四一五
青木ふじ枝　八八・二二〇三
小野木花子　八八・二七四七
青木ユリ子　八八・三四七七
日置哲夫　八八・四五一九

― 小間見 ―

平沢　勤（理事）　八八・三九三七
畑中浄園（副会長）　八八・二四四一
畑中真澄　八八・二四四一
石神尭生　八八・二四一三
稲葉春吉　八八・二五〇三
黒岩きくゑ　八八・二四六〇
筧　明代　八八・二五三二
三島秋男（理事）　八八・二四六一
桑田和子　八八・二四一九
桑田渥見　八八・二四四六
桑田信夫　八八・二四一八
黒岩弘美　八八・二四五八
井俣初枝　八八・二七五八
青地正男　八八・二四四七
大井静子　八八・二三三八
大井正明（理事）　八八・二八九四
籏　等　八八・二七五九
桑田アサ子　八八・二四三九
井上妙子　八八・三五〇八
沢原　勝　八八・三一五〇
山田武司　八八・二四七五
山田和美　八八・三六三一
籏　清子　八八・四一七〇
山田敬子　八八・三九一七
大井ともゑ　八八・二八九三

― 徳永 ―

木島泉（理事）　八八・四一八二
鷲見清（理事）　八八・二〇〇五
鷲見おと　八八・二一八九
直井すゞ江　八八・三五九二
矢野原幸子（理事）　八八・二〇七七
水野志づ子　八八・二六一〇
山内孝一　八八・二六一六

― 牧 ―

木島洋女　八八・二五九一
土松新逸（会長）　八八・二七三一
遠藤賢逸　八八・二一二一
渡辺明夫　八八・二六九五
木島三郎　八八・三五九〇
矢野原吉夫　八八・二一三九
村瀬弥一（理事）　八八・二六〇二
渡辺文子　八八・二六九五
遠藤富貴子　八八・二一二一
山内喜久子　八八・二六一六

― 河辺 ―

清水幸江　八八・二〇一九
横枕千代子　八八・二三四九
清水美佐子　八八・二〇二一
前田　孝　八八・二一〇一
前田　鈴　八八・三六六六
臼田とも子　八八・二二五〇
臼田百合子（理事）　八八・二〇四六
前田和美　八八・三六六六
岩谷ひとみ　八八・二六八三
岩谷千代子　八八・二一一一
横枕七右衛門　八八・二三四九
岩谷さち　八八・三一一四八
尾藤元子（理事）　八八・二一一四七
前田とせ子　八八・二一一〇一
岩谷ゆう　八八・二三八八

― 神路 ―

森　忠敬（顧問）　八八・二〇八三
臼田尊徳　八八・三七三〇
羽生　清　八八・二二七一
山田真人（理事）　八八・二一一四
金子政子　八八・三四二六
滝日準一（理事）　八八・二七〇五
粟飯原常人　八八・二三六二
土松康二　八八・二七二九
日置貞一　八八・二六六二
土松貞二　八八・二九八〇
日置　昇　八八・二六三六
遠藤米吉　八八・二六三七
遠藤光平　八八・二九八一
遠藤周一　八八・二八九〇
滝日義一（理事）　八八・三〇六二
滝日　治　八八・三四〇六
田口勇治　八八・二九五〇
斎藤太門　八八・二九二二
松森　茂　八八・二九二三
加藤一男　八八・二八七〇
清水　定　八八・二七一〇
日置元衛　八八・二四一七
粥川　溜　八八・二三七八
本田欽一（理事）　八八・二一六〇
野田嘉明　八八・二〇四三
尾藤佐紀子　八八・二三五三
加藤登美子　八八・二八七〇
滝日和子　八八・三〇六二
遠藤甲子男　八八・二九三五
早瀬ふみ子　八八・二三二七

― 栗巣 ―

島崎増造（監事）　八八・二二三六
増田洋子　八八・四〇四一
筧政之助（理事）　八八・四〇三一
中山周左ェ門　八八・二七二八

武田信康　八八―二二八四
鷲見豊夫　八八―二七八八
野田光誠　八八―四〇二七

―古道―

細川　優（理事）　八八―二八六一
清水克巳　八八―二八六二
清水行雄　八八―三九〇八
歳藤堅正　八八―三九七九
清水久子　八八―三九〇八
稲葉君枝　八八―二八六三
平沢えるこ　八八―三八七三

―名皿部―

有代真一　八八―三七九一
有代和夫　八八―二二〇一
森下正則　八八―三四一三
佐尾チドリ（理事）　八八―三五四四
鷲見昭三　八八―三四三一
永谷正子　八八―二六五四

―島―

森藤雅毅（理事）　八八―二六八四
須甲甚一　八八―二六六七
山田長次　八八―三六四八
山田昌枝　八八―三六四八
森　数雄　八八―二五五四
田中　篤　八八―二七九二
奥田昌明　八八―二五二〇
直井篤美　八八―二六二二
此島修二（理事）　八八―三六五九
雉野尚子（理事）　八八―三五六四
遠藤利雄　八八―三五二六
石井敏子　八八―二五〇二
此島吹子　八八―四〇九五

平成10年度　決　算　書

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	決算額	増減	摘要
前年度繰越金	19,260	19,260	0	
会費	1,937,000	1,581,000	△356,000	
会員費	325,000	321,000	△4,000	正会員 2,000×153 家族会員 1,000×15
特別会員費	1,612,000	1,260,000	△352,000	日帰研修 173,000 宿泊研修 1,057,000 役員会 30,000
補助金	100,000	100,000	0	大和町より
寄付金	1,000	26,500	25,500	土松会長 他
雑収入	740	147	△593	普通預金利子
合計	2,058,000	1,726,907	△331,093	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費	80,000	22,686	△57,314	
総会費	50,000	17,820	△32,180	
役員会費	30,000	4,866	△25,134	
事業費	1,832,000	1,545,486	△286,514	
研修費	1,747,000	1,467,586	△279,414	日帰研修 222,381 宿泊研修 1,188,632 役員会 37,380 促進委員会研修 19,193
会報発行費	75,000	77,900	△2,900	
事業費	10,000	0	△10,000	文化財展示費
事務局費	2,000	0	△2,000	
消耗品費	1,000	0	△1,000	
通信費	1,000	0	△1,000	
旅費	0	0	0	
県協会会費	73,000	72,000	△1,000	
積立金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予備費	11,000	2,030	△8,970	
合計	2,058,000	1,702,202	△355,798	

平成11年度　予　算（案）

（収入の部）　（単位：円）

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
前年度繰越金	24,705	19,260	5,445	
会費	1,937,000	1,581,000	356,000	
会員費	325,000	321,000	4,000	正会員 2,000×155 家族会員 1,000×15
特別会員費	1,612,000	1,260,000	352,000	日帰研修 8,000×40 宿泊研修 28,000×40 役員会 2,000×20 促進委員会 6,000×22
補助金	100,000	100,000	0	大和町より
寄付金	1,000	26,500	△25,500	
雑収入	295	147	148	普通預金利子
合計	2,063,000	1,726,907	336,093	

（支出の部）　（単位：円）

項目	予算額	前年度決算額	増減	摘要
会議費	80,000	22,686	57,314	
総会費	50,000	17,820	32,180	
役員会費	30,000	4,866	25,134	
事業費	1,832,000	1,545,486	296,514	
研修費	1,747,000	1,467,586	279,414	日帰研修 320,000 宿泊研修 1,120,000 役員会 40,000 促進委員会研修 132,000 研修助成 135,000
会報発行費	75,000	77,900	△2,900	
事業費	20,000	0	20,000	文化財保護活動費
事務局費	2,000	0	2,000	
消耗品費	1,000	0	1,000	
通信費	1,000	0	1,000	
旅費	0	0	0	
県協会会費	72,000	72,000	0	
積立金	60,000	60,000	0	重要史料出版基金の積立
予備費	7,000	2,030	4,970	
合計	2,063,000	1,702,202	360,798	

収入 1,726,907円 ― 支出 1,702,202 ＝ 24,705円
（次年度へ繰り越し）

積立金　合計金240,000円（平成7年度、8年度、9年度、10年度各60000円）

編集後記

●往事渺茫（びょうぼう）　都て夢に似たり
旧遊零落（れいらく）して　半ば泉に帰す

すぎ去った昔のことは、遠くぼんやりとかすんでしまって、すべて夢のようである。かつて一緒に遊んだ友達も、からだはおちぶれて、しかもその半分は黄泉（あのよ）へ行ってしまった。

この詩の作者白居易（七七二～八四六）ならずとも、私達会員の中にも悲報をまぬかれることはできません。

●会報二十四号をおとどけすることになりましたが、編集子自らが不如意のものになってしまったことを感じ、申し訳ありません。

●今春三月の文化財研修旅行は、従来とちがった趣の旅でした。観音信仰が一般庶民の中に力強く根付いていることを痛感しました。

●ご多忙の中を、原稿をお寄せ下さったかたがたに、厚く御礼申し上げます。

●快適の五月の空が、やがて梅雨の空にかわります。会員の皆様方のご健勝を念じ上げます。

（畑中記）

「文化財やまと」第二四号　平成十一年六月一日発行　発行者／大和町　文化財保護協会　代表者／土松新逸　印刷者／白鳥印刷